

成果と課題

今回の研究で得られた成果と課題をまとめた。

1 研究の成果

(1) 診断的評価や学習指導の過程における評価

教師にとっては、単元開始時の診断的評価によって生徒のレディネスを確認することができ、学習指導の過程における評価によって生徒の学習状況を把握でき、よりの確な指導ができた。

生徒にとっては、診断的評価によってこれからの学習内容や学習目標を確認することができ、学習に対する主体性を高めることができた。また、提出したワークシートに教師からの助言を書き添えて返却したことや、確認テストによる自己チェックによって、自己の学習状況を把握することができ、学習の改善につながった。

(2) 生徒の自己評価・相互評価

診断的評価や学習指導の過程における評価に加えて行ったことにより、教師にとっては生徒の考えや感想などを捉えやすくなり、「関心・意欲・態度」をはじめとする生徒の学習状況を一層把握でき、授業の改善に生かすことができた。

生徒にとっては、教師による評価や生徒同士による相互評価の結果を知らされることで、自己評価の結果との違いを認識し、自己を評価する力や自己の学習活動全体を見通す力（いわゆるメタ認知）が育まれ、主体的に学ぼうとする意欲が芽ばえてきた。

(3) 「知識・理解」に偏らない授業の工夫

ワークシート、確認テスト、課題追究学習、調べ学習などの学習活動を行い、教師が指導・助言を加えることにより、地理的技能が向上したり、自分の考えをまとめる力がついたりするなど、「技能・表現」や「思考・判断」の力が向上した。

また、基礎的・基本的な知識の定着度が高まり、学習意欲も向上した。なかには、自ら発展的な課題を設定し、主体的に追究する生徒もいた。

2 今後の課題

(1) 限られた時間で実施できる課題追究学習の工夫

各指導事例では、課題を追究する活動を取り入れたが、かなりの時間を要してしまった。

課題追究学習については、何時間もかけるものだけでなく、1時間あるいは20～30分で取り組めるものを研究・開発していくことも求められている。年間指導計画に明確に位置づけ、限られた時数で学習効果をあげられる指導方法を工夫していく必要がある。

また、課題追究学習を実施する際には、教師は生徒に対して追究の仕方を十分に指導する必要がある。初めは、教師が設定したいくつかの課題の中から選ばせる方法もある。生徒は、課題設定、情報の収集・選択・まとめ、考察、発表というサイクルを何度も繰り返すことを通して、自ら課題を設定し追究する力を身に付け、教師も追究の指導の仕方が上達していくものと考えられる。

(2) 生徒の自己評価・相互評価の活用

自己評価や相互評価は、そのまま学業成績（評定）に反映させるものではなく、生徒自身が自己の学習過程を振り返り、改善すべき点や課題を発見し、学習状況の改善に生かすという趣旨で用いることが望ましい。

生徒の自己評価や相互評価を実施する際には、教師は評価項目を精選し、具体的な判断基準を示す必要がある。そして、生徒の自己評価や相互評価の能力を育成するには時間がかかるので、回数を重ねて体験させることが大切である。初めは低いレベルの自己評価であっても、教師や他の生徒による評価結果を知らせることで、自己評価の能力は高まっていく。学習の振り返りを行う習慣を付けるためにも、自己評価の結果を安易に批判するようなことがないようにしたい。

また、生徒の自己評価は、教師にとっても、ペーパーテスト等では直接判断しにくい「関心・意欲・態度」などの評価の信頼性を高めるのに有効であり、自己評価の結果を分析することにより、授業の改善につなげることができる。

(3)適切な評価規準設定及び評価技術の向上

具体的な評価規準については各学校で設定することになっているが、設定した評価規準が適切であるかについて十分に検討し、実践を重ねながら改善していく必要がある。また、到達度を判断する基準についても、教師と生徒の双方が納得できる、より妥当性の高いものにしていく必要がある。

今回は、生徒が6名、12名、21名の授業であったが、不慣れなことも加わり、単元の評価計画を作成することは大きな負担であり、実際に評価する際には予想した以上に困難を感じた。通常の人数の授業を進める過程で、観点別の評価規準に基づいた適切な評価をどのように行うかについては、今後の課題である。

現在、指導と評価の一体化を一層推進することが求められており、学校あるいは教科、科目としての評価の方針や内容、方法などについて、教師間の共通理解を図り、各教師が指導と評価についての技量を高めていく必要がある。